

「〈園対象〉保育・幼児教育施設における  
新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査」より

# 保育の質向上と感染対策 2つの軸で園のあり方を探る

コロナの感染が拡大する中、各地域や各園で手探りの対策が進められてきました。全国各地の保育現場での課題意識や具体的な対応を共有することで、有効な方向性を見いだすことを目的として、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（以下、Cedep）では、園長・施設長などを対象とした調査を実施しました。同調査にかかわった3人の先生方に、データから見えた現状や課題、今後の取り組みのヒントをうかがいました。

## 東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター（Cedep）



准教授  
野澤祥子先生  
(のざわ・さちこ)

博士(教育学, 東京大学)。専攻は発達心理学・保育学。内閣府「子ども・子育て会議」委員。厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」委員。

PDF版では写真を掲載しておりません。ご了承ください。

特任准教授  
淀川裕美先生  
(よどがわ・ゆみ)

博士(教育学, 東京大学)。専門は保育学。2歳児同士の対話、食事場面での保育者と子どもの対話、園内研修での対話や学びについて、主に研究している。



特任助教  
高橋翠先生  
(たかはし・みどり)

専門は認知心理学、発達心理学。Cedepでは主に未来社会 Society5.0における保育のあり方を探るべく、ICTやAIを活用した実証研究に取り組んでいる。

## 1 《 調査のねらい 》

今回の調査は、現場の管理職や保育者に  
どう活用してほしいと考えて実施されたのでしょうか。

**実態を捉えたデータをもとに  
今後の保育の議論を深めたい**

野澤先生 Cedepでは、日常的に園の現場を訪問して、乳幼児期の発達と保育の実践・政策を研究しています。ところが、コロナの感染拡大を受け、2020年2月後半から園訪問が困難になりました。この非常事態に私たちに何ができるかを考え、まずは今の特殊な状況を正確に捉えた上で現場に寄り添い、今後の保育を考えることが重要と判断して、全国に向けた調査を企画しました。

現在の状況はだれにとっても初めての経験で

あり、さまざまな分野の専門家が手探りの対策を試行しています。この調査も1つの答えを導き出すのではなく、あくまでもデータから見えることを議論の<sup>そじょう</sup>組上に載せて、今後の保育の方向性を見いだしていく一助となることをめざしました。

調査全体を通して、地域、園、そして、個人により、状況は大きく異なることが改めてわかりました。今後の対策を検討する上では、大前提として、その多様性を尊重しながら問題を1つに集約しないことを大切にしていきたいと思っています。

## 2 《 保育や行事のあり方 》

感染対策という制限のある状況の中で、  
日々の保育や園行事はどのように捉えるべきとお考えでしょうか。

### 感染対策に偏りすぎず 園の理念とのバランスを考慮する

野澤先生 現在の状況では感染対策を欠かすことはできず、いわゆる「3密」の回避が求められます。感染対策は、園運営の1つの「軸」になっていると思います。その背景には、子どもや保護者、保育者を感染から守りたいという思いに加え、感染者に対して厳しい目が向けられやすいという社会の状況も関係しているのでしょうか。

しかし、園には安全管理だけではなく、保育を通して子どもの育ちを支えるという重要な役割があります。いま一度、もう1つの軸として、園ではどのような子どもを育てたいかという理念や方針を見つめ直す必要があります。そして、園の理念と感染対策という、2つの軸をしっかりともち、そのバランスをとりながら日々の保育や行事のあり方を検討することが大切だと思います。

2つの軸をもつと、「子どもの育ちのためにすべきこと」と「感染対策のためにすべきこと」が見えやすくなります。例えば、「情緒の安定のために必要な抱っこは、子どもの育ちを支える上で欠かせないため、しっかりと行う」「消毒や換気は丁寧に」など、バランスを考慮した保育のあり方が見えてきます。運動会などのさまざまな行事も、一律に中止するのではなく、子どものためにできることが見えやすくなると思います。

この2つの軸のバランスは、園によって、また、そのときの状況によっても異なります。地域の感染状況は刻々と変化しますし、立地や施設の構造設備などの園固有の事情のほ

か、保育者や保護者の考え方などさまざまな要素を踏まえて、判断を行う必要があります。

その際に大切なのは、いつでも子どもを真ん中に置いて考えることです。園はあくまでも子どもの遊びや学び、育ちを保障する場であることを保護者と共有し、保護者からの声を聴きながらも、「子どもにとってどうか」という視点から一緒に考えることができるとよいと思います。

### 園行事や日々の保育の意義を問い直して 改善する好機でもある

淀川先生 コロナ禍にある今の状況のように、私たちは今後、先行き不透明で答えのない問題にますます出合うでしょう。そうした答えのない問題に対して、他者との対話の中で知恵を寄せ合い、判断し、新たな知を生み出していくことが求められています。子どもの育ちとしても大切ですが、私たち大人も今まさに、それが問われています。大変な状況ですが、私たちが多様な価値観をもちながら、よい意味で変化するきっかけとしてこの状況を捉え、議論できたらと思います。

実際、感染対策の取り組みとして多く挙げられたのは、園行事の中止・縮小でした(P4 図1)。当初の目的は感染対策でしたが、「これまで通りのやり方でよいのだろうか」「本当に子どもや保護者のためになっていたのか」などと問い直すことにより、結果的に行事の改善につながったといった声も多く聞かれました。また、感染対策の一環として、一斉の活動を個別にしてみたら、子どもの姿が前よりも見えるようになったという保育者

#### ■ 〈園対象〉保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関する対応や影響に関する調査

調査の実施者：東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (Cedep)

調査の目的：新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、安全・安心を確保しつつ、子どもたちの遊びや学び、育つ権利を保障することが難しい状況に直面する中で、保育・幼児教育の現場での対応と家庭の実態について現場の声から把握し、共有・発信する。

調査内容：園の基礎情報、コロナにかかわる園の状況、コロナ予防対策、職員のストレス状況、家庭への対応、自治体・国の対応

調査対象者：保育・幼児教育施設の園長・施設長及び職員（すべての役職の方々）

実施期間：2020年4月30日～5月12日

調査方法：ウェブ調査 (Cedep ウェブサイト上での協力依頼、保育・幼児教育関連団体への周知依頼、その他 SNS などによる周知を行った)

有効回答者数：954人 (幼稚園 27人、認可保育所 317人、認定こども園 544人、その他 66人。私立園の関係者が9割前後を占める)

◎報告書 PDF は、以下のリンク先よりダウンロード可能です。

[http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects\\_ongoing/covid-19study/](http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/covid-19study/)

の声も聞かれました。

一方で、懸念点の1つが、現在の状況が長引くことによる子どもへの影響です。4、5歳児であれば感染対策やソーシャルディスタンスについて丁寧に説明をすれば、自分たちなりに考えて行動ができます。しかし、より年少の子どもは「頻繁に手洗いや消毒をする」「人となるべく離れる」「食事中に話さない」などといったことを、常識と受け止めてしまう恐れがあります。

今後もしばらく感染のリスクがある中で、この時期だからこそ必要な、他者との親密な関係の中での子どもの育ちや大切な経験をどう守れるかが、重要なテーマとなっていると思います。

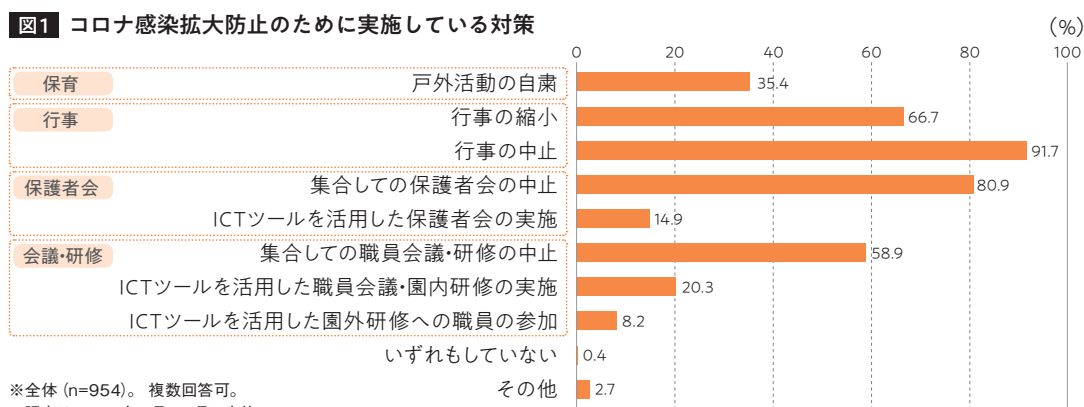
### すべきこと、できることを 地に足をつけて考えたい

**高橋先生** コロナの感染拡大に伴い、新たな保育に移行しなければとプレッシャーを感じる園が多いかもしれません。しかし、必要な

感染対策を施した上で、自園の理念に沿った保育を行い、その方針を保護者に発信するという枠組みの中で具体的に考えていくと、案外、「特別に新しいことをする必要はない」という結論に至る可能性も高いのではないのでしょうか。まずは地に足をつけて、すべきことやできることを1つずつ考えていきましょう。その際には、感染の予防対策だけでなく、感染したときにどう把握・処置するかといった対策も、自治体と連携しながら構築して行ってほしいと思います。

コロナ禍をきっかけとして、ICTツールの導入もこれまで以上に検討されています。従来は事務作業の省力化の一環として活用されるケースが多かったのですが、幼児教育や子育て支援の可能性を広げるツールとしても注目されるようになりました。これまでの幼児教育の歴史や財産からよい部分を引き継ぎつつ、テクノロジーを効果的に導入して、新たな幼児教育を探究していくタイミングにもなっていると感じています。

図1 コロナ感染拡大防止のために実施している対策



※全体 (n=954)。複数回答可。  
※調査は2020年4月～5月に実施。

## 3 《 保護者対応 》

現在の状況乗り越えるためには保護者との協力が欠かせません。  
保護者と良好な関係を築く上では、どのような点が重要とお考えでしょうか。

### 保護者も当事者として ともに向き合う関係を築く

**高橋先生** コロナ禍は、子どもと保護者にとって、園が重要な社会インフラであること、そして、現状では保育や幼児教育を担う主体が家庭か園の2択になっていることを、改めて浮かび上がらせました。保護者は園に子ど

もを預けることで仕事や家事などができますし、子どもは園生活を通してほかの子どもとつながり、社会に参加する場をもつことができます。その機能が一時的に断たれて、園の重要性に改めて気づいた保護者が多かったようです。

コロナに対する保護者の考え方は個人差が

非常に大きいことが調査でも明らかになりましたが、一部には園に対して「ゼロリスク」を求める様子も見られます。保護者が園に完璧な対応を求めて何かあるたびにクレームを入れる状況では、保護者と保育者の双方がストレスを感じやすいですし、園が感染対策に過度に偏ることにもなるでしょう。実際に、保育者の悩みは、「保護者対応」が最も高い割合を占めています（図2）。

保護者自身にも園運営の当事者という意識をもってもらい、一緒に話し合いながらコロナに向き合っていく関係が理想です。そのためには、園が保育を通して実現したい理念を明確にして、コロナの感染対策と並行してどのような育ちを支えたいかをわかりやすく伝えることが求められるでしょう。

### 自園の考え方を誠実に、的確に、自分たちの言葉で伝える

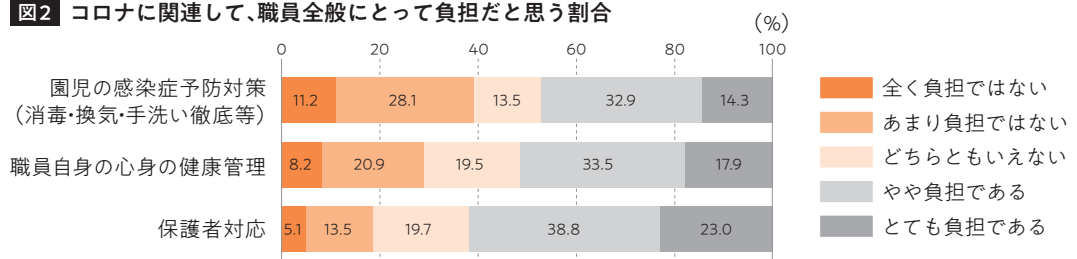
淀川先生 コロナ禍の状況で体験したこととして、情報の不足や不確かさ、情報伝達の遅

れが、不安や不信感、ストレスを生むということがありました。

登園自粛などの自治体の方針を保護者に伝える機会が多いと思います。事務的に通知した園もあれば、自園の考えを交えて自分たちの言葉で説明した園もあったようです。後者の方法をとったある園では、その後の保護者との関係も良好だったとうかがいました。園の当事者としての考えが具体的に伝わると、保護者もまた、自分たちの意見を述べて一緒によりよい保育を考えていこうという思いがもてるのだと思います。

また、先日、園児に感染者が出た園の園長先生にお話を聞く機会がありましたが、できる限り先手の情報発信を心がけたことで、大きな混乱は生じなかったそうです。情報発信が遅れると、うわさが独り歩きしたり、臆測を呼んだりして、不信感につながりかねません。園が当事者として、自園の考え方を誠実に、的確に伝えることが、保護者と対話のできる関係性をつくる鍵になると考えます。

図2 コロナに関連して、職員全般にとって負担だと思う割合



※全体 (n=910)。 ※調査は2020年4月～5月に実施。

## 4 《 子どもや職員のメンタルヘルス 》

子どもや保育者の不安やストレスを軽減するために、園ではどのような取り組みができるのでしょうか。

### 現実問題の解決と心のケアの両面から保育者のサポートを

淀川先生 コロナ禍という不安な状況の中、だれもが多かれ少なかれストレスを抱えています。園では、保育者が子どもに説明したり一緒に話したりすることもあります。子どものほうから遊びの中で「ソーシャルディスタンスなんだよ」と言って、経験を再現したりします。ゆったりとした雰囲気の中で、子

どもが安心して思いを出すことができ、保育者も子どもの表現を受け止めたり、共感したりすることが大切だと思います。各家庭の感染への心配のしかたもさまざま、なかには極度に心配している家庭もあるでしょう。子どもにとって園という場で自分の不安やよくわからない気持ちを出せるということが、とても大事だと考えています。

また、園運営においても、保育者の抱える

不安やストレスへの対処が大きな課題です。調査では、職員（同僚）や回答者自身がどのようにストレスを緩和しているかを聞き、5つの観点で整理しました（**図3**・**図4**・**図5**）。

回答者自身でもっとも多かったのは、運動や趣味などで気分転換やストレス解消を図る「気晴らし型コーピング」でした。

職員（同僚）で一番多かったのは「問題焦点型コーピング」でした。これは感染対策や勤務形態について話し合うなど、直面する問題そのものを解決しようとする行動です。次に多かったのは、ストレスや不安などの感情をだれかに話して発散する「情動焦点型コーピング」でした。このように現実問題の解決と情動面のケアの両方を行うことは、保育者のストレス緩和に有効と考えられます。

調査時から数か月が経ち、自治体などによる取り組みも進んでいるとは思いますが、職員同士のケアだけでなく、外部とつながり、保育者の心のケアができるネットワークの実実が望まれます。

### ネガティブ感情とのつき合い方を 研修などで共有したい

**高橋先生** もやもやとした気持ちを抱えたま

までは不安は解消されません。できるだけ自分の感情を言語化して意識化すると、対処法が見えてくるといこともあります。そうしたネガティブな感情とのつき合い方について、園内研修などで共有するのよい方法です。その際、不安やストレスは一人ひとり固有のストーリーがありますから、1つに集約することなく、ファシリテーター役の人がそれぞれを引き出して、対話をしていくことが大切になります。

人間のストレスモデルでは、直近の問題に対処するために強いストレス反応が表れた後、問題が長引くと、緊張感が保てずに気分が落ち込むなどのうつ状態に陥りやすくなります。そうした兆候を見逃さないために、保育者が相互にメンタルヘルスをチェックする体制を整えることも大事でしょう。

### 対話により意見を共有して 園内に安心できる風土を

**野澤先生** コロナに対する考え方は、園内でも大きな個人差が表れます。例えば、園長、保育者、看護師で感染対策をどこまですればよいかの考え方が異なることがあります。そのままの状態にしてしまうと園内に相互不信

**図3** ストレスコーピングの定義

**問題焦点型コーピング**  
直面している問題そのものを解決しようとする行動。自分の力ではどうにもならない場合は、担当を代わってもらうなどの回避行動も含まれる。

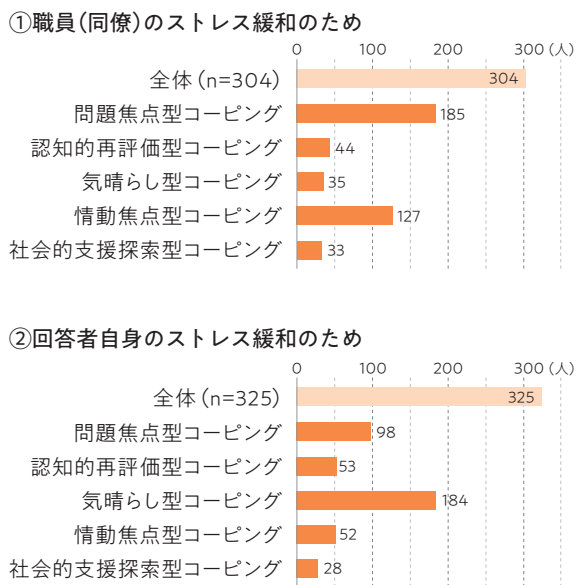
**認知的再評価型コーピング**  
直面している問題に対して、見方や発想を変えて前向きに考える、あるいは距離を置くなど、認知を再評価し、適応するための対処行動を指す。ポジティブシンキングとも呼ばれている。

**気晴らし型コーピング**  
運動、趣味、レジャー、カラオケなどのいわゆるストレス解消法で、気分転換、リフレッシュ、ヨガなども該当する。

**情動焦点型コーピング**  
ストレスや不満や不安、悲しみなどの感情をだれかに話すことで、発散する方法。

**社会的支援探索型コーピング**  
問題に直面したとき、上司や同僚、家族、友人などに相談し、アドバイスやサポートを求める対処行動。

**図4** 職員（同僚）および回答者自身のストレスを緩和するためにやっていること・心がけていること



※複数回答可。 ※調査は2020年4月～5月に実施。

が生じて、それが子どもの育ちにマイナスの影響を及ぼす恐れもあります。

園の理念と感染対策という2つの軸のバランスをどこに置くか、園内でしっかりと対話

をして考えを共有し、園内に温かな安心の風土をつくっていくことが、すべての基本になると考えています。

図5 「職員(同僚)のストレスを緩和するために行っていること」の具体的な記述(抜粋)

#### 問題焦点型コーピング

- 園内の衛生管理を徹底し、コロナ感染対策をする。
- 情報を共有する(決定事項は速やかに全職員へ知らせる等)。
- 職員に衛生物品やマスクなどを支給する。

#### 認知的再評価型コーピング

- いつもと変わらない保育でよいことを伝え、心に余裕をもった勤務を促している。
- 預からなければいけない子どもを預かっているのではなく、私たちが子どもたちを預かっているから社会が回っているというプライドをもてるように伝えている。医療従事者等を支えていることを誇りに思う。
- できることをして感染したらしかたがないという気持ちで仕事をしている。

※調査は2020年4月～5月に実施。

#### 気晴らし型コーピング

- 休憩をしっかりとる。
- ノンコンタクトタイムをとる。
- 戸外や換気のよい場所で距離を保って軽い運動やリズム体操、ヨガなどを預かりの子どもたちとともにやる。

#### 情動焦点型コーピング

- 積極的に声かけをする、職員同士がおしゃべりしやすい環境をつくる。
- ICTツールを活用し、まめにコミュニケーションをとる。
- 情報交換というおしゃべりの場で、話を聴く。愚痴も可とする。

#### 社会的支援探索型コーピング

- 話し合いを行い、職員の不安の軽減に努めている。
- 不安はその都度解決できるように、何かあればいつでも話を聴き、相談に乗ることを心がけている。
- 職員同士でやり方や不安な点などを話し合う機会を設ける。

## 5 《 現場のみなさんへのメッセージ 》

最後に保育の現場で奮闘する保育者のみなさんにメッセージをお願いします。

**高橋先生** 保護者調査\*では、園に対する感謝の言葉が何度となく聞かれました。保護者対応に難しさを感じる場面も多いかもしれませんが、多くの保護者は園や保育者に深い感謝の念を抱いていることをお忘れにならないください。そして、地域の子どもの育ちを支える重要な存在であるという意義と価値を、何よりも保育者のみなさんご自身に十分に認識していただきたいと思います。

**淀川先生** さまざまな考え方や価値観が行き交う中、感染対策とこの時期の子どもたちにとっての大切な経験とのせめぎ合いの最中で、日々の保育をされていることと思います。感染予防を考えた環境構成、人の配置、送迎方法など、方法論の検討が進む一方で、子どもや保育について大切にしてきた価値や、描いていた未来はどのようなものだったかを、

改めて問う時期に来ていると思います。いろいろな対話を通して、一緒に考えていきたいです。

**野澤先生** 園や保育者に対してさまざまな要求が寄せられる中で、精いっぱい子どもたちを守ろうとする姿には感謝と尊敬の念を覚えています。子どもの育ちこそみなさんの喜びであり、やりがいでもあるのでしょうか。感染対策を施しながら、子どもの育ちを大切に保育は容易ではないと思いますが、本調査が今後の実践の参考になることを願っています。調査では、みなさんのご協力により現場の貴重な声が集まりました。そのデータをもとに社会に情報を発信し、みなさんと一緒に考えていくという循環をつくり出し、微力ながら、今後の保育・幼児教育に貢献していきたいと思っています。

\* Cedepでは、本調査と同時に、保護者を対象とした「新型コロナウイルス感染症流行に伴う乳幼児の育成環境の変化に関する緊急調査」を実施しています。